2018 推・帰・社

受　験 番　号	

医学部保健学科

小論文Ⅱ問題

注意事項

１．試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
２．この冊子のページ数は４ページです。落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所等があった場合は申し出てください。
３．問題冊子の余白は下書きに使用してもかまいません。
４．解答は所定の解答用紙に記入してください。
５．解答用紙は持ち帰らないでください。
６．問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

1　次の文章を読んで，問１～３に答えなさい。

「以心伝心」「言わぬが花」「沈黙は金なり」「あうんの呼吸」「つうと言えばかあ」「男は黙ってサッポロビール」……。日本には，明確な言葉を交わすことなくとも相手とわかり合える，という「信仰」が昔から根強い。筆者が「日本人のコミュニケーションスキルを上げるお手伝いをしたい」と１人で仕事を始めたとき，昭和の高度成長時代にまじめ一徹で働き上げた父にこう言われた。「『巧言令色鮮し仁』という言葉を知っているか」。ぺらぺらと話す口のうまいやつは信頼できない，重要なのは黙って仕事をすること――。そういう価値観がまだまだ根強いということを理解しておきなさい，というアドバイスだった。

国際的によく知られているのは，(1)日本人は「きわめてハイコンテクスト」のコミュニケーションスタイルである，ということだ。コンテクストとは文脈という意味だが，話し手と聞き手との間の文化的背景・文脈の共通性が高いのがハイコンテクストの文化，低いのがローコンテクストの文化ということになる。

この概念は 1976 年にアメリカの人類学者エドワード・ホールによって提唱された。島国であり，人種・文化的な多様性があまりない日本の場合，話し手と聞き手との間に共通項が多く，言葉を尽くさずとも何となくわかりあえる，暗黙知がある，という考え方だ。

一方，ローコンテクストの文化では，共通項が少ないので，きっちりと言語化し，クリアでシンプルでわかりやすいメッセージを伝え，あいまいさを排除しなければならない。ハイコンテクスト文化とローコンテクスト文化はまったく対極のスタイルだが，その中でも人種のるつぼであるアメリカが最も，ローコンテクストな国であり，日本は反対に最もハイコンテクストな国と位置づけられている。

こうした「行間を読む」スタイルの日本のコミュニケーションは海外の人にとってはなじみにくい。たとえば，「難しい」という言葉。アメリカ人の知人は「これは difficult（困難だ）の意味なのか，impossible（できない）の意味なのかわからない」という。同じ言葉がさまざまな意味を持っているだけではなく，日本語は特に同音異義語が多く，文脈の中で判断しなければならないケースも往々にしてある。

日本のコミュニケーションの特殊性はまだまだある。フランスのビジネススクール INSEAD のエリン・メイヤー教授の著書『The Culture Map』（日本語版は『異文化理解力』）によれば，日本は「評価のスタイル」「説得の方法」「決断志向」「見解の相違の解決法」などにおいて，特異な傾向を示している。つまり，極度に「非言語志向」で，「ネガティブフィードバックを避け」，「階層主義的」で，「合意志向」で，「対立回避型」のコミュニケーションスタイルであるということらしい。

こうしたスタイルは「一億総中流」の島国の秩序を保つために生み出され，機能してきた，「同質性」を前提とした日本型のコミュニケーションといえるのだろうが，グローバル化，都市への一極集中，過疎化，高齢化，格差の拡大とともに国民の価値観が多様化する中で，効能を失いつ

つあるように思える。つまり，言葉にしなくても通じてきたがために，言語化し，はっきりとしたメッセージで伝える力が弱く，上司が部下を「しかる力」もなく，両者に距離感があり，合意を重んじるがために迅速性に欠け，「見解の相違」が発生したときの正しい対処の仕方もわからない，といったようなことである。

通算 7 年ほど海外で暮らした筆者だが，さまざまな先進国と比べても，日本は本当に「いい国」である。治安がよく，クリーンで，自然は豊か。食事はおいしく，教育は比較的安価でしっかりしている。医療は充実しており，アメリカなどと比べれば信じられないほどの低料金だ。人々は礼儀正しく，親切で正直。ドラッグや銃などといった問題も圧倒的に少ない。しかし，(2)この国の人々の幸福度は極めて低く，孤独で，多くの働き手は仕事に愛着もやりがいも覚えていない。そして，絶望的に未来を悲観している。労働環境や貧困，長引く経済停滞などさまざまな外因はあるが，大きな要因の 1 つとして見逃してはならないのが，「コミュニティ」と「コミュニケーション」の問題であると考えている。

過疎化などにより，地域社会が崩壊していく中，人々がよりどころにできるコミュニティを見つけにくくなっている。海外では宗教や NGO，NPO 活動などに居場所を求める人も多いが，日本では，「家庭」や「職場」以外の「サードプレース」はあまり見当たらない。人は人とのかかわりの中で生きていく社会的動物，ソーシャルアニマルである。そのかかわり合いのゆりかごとなるコミュニティの欠落は孤独感，喪失感につながっている。

そして，長年の「非言語」文化により，使わない筋肉がこそげるように落ち，退化してしまった日本人の「コミュニケーション力」。コミュニケーションとは人と人とを結び付ける強力な糸であり，身体に命を巡らせる血液のようなもの，つまりコミュ力はまさに「生きる力」そのものである。「忖度」の名のもとに，血を通わせる努力を怠ってきたわけだが，伝家の宝刀のごとく，従来のやり方を堅守しなければならないものではないし，良い部分は残しながらも進化させていくべきものであろう。

（出典：岡本純子，日本人が「黙って忖度」ばかりする根本原因．東洋経済オンライン，2017 年 6 月 13 日　より一部抜粋改変）

問１　下線部(1)のような状況になった背景を，50 字以内にまとめ，解答欄 1 －１に記しなさい。

問２　下線部(1)のような状況の特徴を，100 字以内にまとめ，解答欄 1 －２に記しなさい。

問３　下線部(2)の状況を解決するために，筆者が「コミュニケーション力」を重要だと考えている理由を，200 字以内にまとめ、解答欄 1 －３に記しなさい。

2　次の文章を読んで，問１，２に答えなさい。

ある分野で熟達を目指した人たちが最も油の乗る時期，すなわちピークに達する年齢は，その人が目指す分野の性質によって大きく異なる。では，それぞれの分野で国際的に一流と認められるようになるには，ふつう何年くらいかかるのだろうか？　フロリダ州立大学教授で熟達の認知研究の第一人者であるアンダース・エリクソンによれば，国際的に活躍できる熟達のレベルになるには，どんな分野においても１万時間程度の訓練が必要になるそうだ。

1 日 2，3 時間，毎日訓練をつづけると 10 年くらいになる。これを「10 年修行の法則」という。チェスや楽器演奏，ある種のスポーツ（とくに身体の肉体的成熟の完成が必須条件でないスポーツ）のように，10 代半ばに一流になる，いわゆる「天才」と呼ばれる個人が出現することがたしかにある。しかし，そのような「天才」は，ほとんどの場合，非常に年少の頃から音楽やスポーツの道に進むことを決めていて，10 代半ばにはすでに 10 年間におよぶトレーニングの集中期間を経てそこに至っている。

エリクソンたちは，プロの音楽家たちを 4 つのレベルにランク付けして，それにアマチュアレベルを加えて計 5 グループに分類した。そして，彼らの日常の活動を記した詳細な日記を提供してもらい，この人たちが 4 歳から 20 歳までの間にどのくらいの時間を練習に費やしたか推定した。すると，より達成度の高い熟達者は，達成度の低い熟達者に比べ，20 歳までに約 3 倍もの練習時間を費やしていること，アマチュアレベルの人たちの累積練習時間は，最も達成度が高い熟達者グループの 10 分の 1 でしかないことがわかった。つまり，練習時間と熟達のレベルの間には歴然とした関係があるということだ。

しかし，ただ時間をかければよいわけではない。エリクソンたちは練習時間と達成度の関係を調べただけでなく，練習の質についても調査を行った。アマチュアレベルの人たちは楽しみのための練習をする。それに対して，達成度の高い熟達者たちは，練習を楽しみではなく，向上のために行っている。

誰もが本番では集中して必死になる。しかし，練習でどれだけ必死になれるだろうか。エリクソンによればアマチュアレベルの人と達成度の高い熟達者との間の著しい違いは，練習中の集中度だ。達成度の高い熟達者の練習は高い集中度を保つため，メリハリをつける。集中度が落ちてくると休み，集中度が低下したまま，むやみに練習をつづけることはしない。一流の熟達者は極度に集中し，考え抜いた練習を，後に支障がないように持続できる最大の時間，行っているのである。

（出典：今井むつみ，学びとは何かー〈探求人〉になるために，p.170-172，岩波書店，2016，一部改変）

問１　この文章を 200 字以内に要約し，解答欄 $\boxed{\quad 2 \quad}$ － １に記しなさい。

問２　この文章を参考に，あなたがある分野の熟達者になるとしたら，具体的にどのように取り組むか。解答欄 $\boxed{\quad 2 \quad}$ － ２にその分野を挙げ，あなたの考えを 150 字以内で記しなさい。